

ジョン・ウェスレーの信仰思想 (19)

——クエーカーリズムからの影響——

深 町 正 信

1. はじめに

クエーカーリズムは英国に於けるジョージ・フォックスによる新しい信仰復興運動であり、英国の敬虔主義、ピューリタニズムの流れをひくもので、教理的には内的光、神との直接的交わりを強調していた。

更に彼らは特に万民祭司と聖霊の確証の教理を主張した。

ジョン・ウェスレーは彼らの神学者、ロバート・バークレー (Robert Barclay 1648～1690) を通じこのクエーカーリズムを知らされた。ウェスレーは彼らの聖霊の確証の教理に深い関心をもったが、やがて彼らの個人的、神秘主義的信仰傾向に対し批判をもち、善き業による義認への傾向を否定するようになった。彼はこの点について彼の友達への手紙の中でその類似点と相違点をあげつつ、自分の立場を鮮明にしている (1747年2月20日。クエーカー教徒と呼ばれた人々に最近加わったある人物。彼によって書かれた手紙への回答)。この手紙の内容についてはあとで詳しく述べることにする。

2. ジョージ・フォックスの三つの経験

敬虔主義の流れは17世紀の英国に於ても福音主義的大運動を起した。その一つがジョージ・フォックス (George Fox 1624～1691) によるクエーカーの信仰である。

ジョージ・フォックスは1624年7月、英国のライセンスシェアーのライセン

ダで生れた。父親クリストファー・フォックス (Christopher Fox) は皮織物商であり、母親はメリー・ラゴー (Mary Lago) といった。子供たちは幼少の頃から宗教的環境の中で育てられた。両親は息子ジョージに聖職者になることを願った。しかし彼はそれに強く反抗して、ついに家を出て靴屋の徒弟となった。彼が19歳のとき、彼の身に一つの大きなことが起った。或日、彼がクリスチャンの友達に酒場に誘われて酒盛りをしていたが、この男はクリスチャンでありながら、日頃口で言っていることと実際 (生活) との違いをここでフォックスに嫌という程見せつけた。この時から、彼はすべての人間に対して他人 (stranger) であるということを経験し、これを生活の信条とするようになった。

ここにすでにクエーカー主義の、この世からの逃避により自分を潔めるというモチーフがみられるように思われる。

彼は英国をめぐり歩いて、自分の悩みを打明け、その救いを求めて歩いた。フォックスの悩みとは、大きく整理すると宗教の権威の問題、自分の救いの確信の問題、そして義認と聖化の問題等であった。しかし彼はこれらの問題の解決を直に見出すに至らなかった。

ところが1646年、彼は自分の魂を全く新たにするような三つの経験をしている。第一に、彼がカンタベリー寺院へ行こうとしたとき、彼の心の中に一つの考えが突然浮んできた。それは、すべてのクリスチャンが信者であるとは一体どういうことなのかという疑問であった。信者であるならば神から生れ、死から生命に移っていなければならない筈である。自分を信者と言っても、そのような生活をしていなければ、本当の信者ではないのではないのか。彼はこのような啓示を彼自身の心に深く示された。

第二には、フォックスは或る日曜日の朝近くの野原を散歩していた。そのとき、彼の心の中に次のような考えが浮んできた。それは、聖職者になるためにオックスフォード大学、ケンブリッジ大学で勉強することが何故必要なのかという疑問であった。その当時はオックスフォード大学を卒業することが牧師になることの要件であった。これに対してフォックスは、神学さえすれば聖職者に適わしいというのではなくて、その人の生活こそが大事であるという考えを

与えられた。

第三に、彼は、世界を創造された神は人の作った寺院などに住まわれず、人の心の中に住まわれる。つまり教会とは人の魂の中にこそあるという強い思いを啓示として自覚させられた。

以上の経験がジョージ・フォックスに与えられた三つの啓示と呼ばれている。

1647年から、彼はこの啓示を信ずる信仰に立ち、伝道の生涯に入った。彼は信仰上で多くの迫害に遭遇したが、それらに対して無抵抗で対処した。彼らの礼拝が激しい身震いを伴ったことからフォックスの徒をクエーカー (Quaker) と呼んだ。しかし彼らは自らをフレンド (Friend) と言い、その群れを友の会 (Society of Friends) と呼んだ。

3. フォックスの12の強調点

彼がクエーカー主義の信仰として強調した点を次に考えてみたい。神学者の野呂芳男氏はフォックスの強調した12の点を次の如く述べているが、それに私の意見を多少説明として加えながら以下に列記してみたい。

(1) 男と女とは神がつくられたものである。それ故両者は平等である。

これは換言すると、神の住み給う世界において人間はすべて同権である。それ故すべての人間は発言権をもっている。そこには年齢、性別、地位の区別はなんらないということである。

(2) 神が人にささやきかけ、語るものとして夢を尊重する。つまり、フォックスは夢を聖霊体験と結びつけて考えた。

その夢には三種類あると彼は考えていたようである。(イ)この世の思い煩いからの夢(ロ)サタンの嘆きからの夢(ハ)神が人間に語るから夢をみるという夢とであった。

(3) 内的なものに頼って、外的なものに頼らない。内なる光に権威がある。

彼は、キリストと聖霊とは同じものであると考えた。つまりキリストの霊が聖霊であるということである。二千年前のキリストよりも、今のキリストの語りかけが大切であるとした。そのように彼は人によらず、書物によらず、神の

霊による聖霊の内的証示を強調した。フォックスは内なる光（Inner light）こそが権威の核心であるとした。

(4) 社会的関心

彼は1項に基づき、主人と僕との同格の考え方に立ちながら、女中、下男の給料の問題に取り組み、働く人の正当な報酬を要求して対抗した。英国社会主義の三源泉の一つが、このクエーカー主義であることを見逃す訳にはいかない。その他二つはマルキシズムとメソディズムであることは誠に興味深い事柄である。

(5) アダムの如き完全の主張

彼はキリスト者の完全をアダムの所有した完全、アダムに於ける絶対的完全と考えていた。

(6) 聖霊を与えられないと、聖書の理解は不可能である。

彼の聖書観は逐語靈感説ではなかった。彼によると、聖書の真理は聖霊の力によってはじめて現在の的に理解できる。つまり文字よりも、聖霊を強調した。

(7) キリストがすべての者のために死んだから、信じる者はすべて救われる。

彼は謂ゆるキリストの贖罪について、万民救済説に立っていた。したがって神が或る人を救い、ある者を審きに渡されるというカルヴィンの主張した二重予定説の考え方を真向から否定した。

(8) 教職を認めない。

彼は職業的聖職者を認めず、伝道は金をもらってするものでないと考えた。

(9) 人間の平等

彼らクエーカー教徒は皇帝、王、大統領の前でもお辞儀をしたり、帽子を取らなかった。ジョージ・フォックス自身はクロムウエルの前に立たされたとき、帽子を取らなかったということである。そして彼らはお互いを thou, thee (汝、汝等) と呼び合った。これは人間の同権の立場からの考えによっていた。

(10) 礼典の拒否

彼らは一切の聖礼典を拒否し、洗礼を認めなかった。

(11) 誓いの禁止

彼らは誓うことを決してしなかった。そしてお互いに信頼せよと説いた。

(12) 戦争、奴隷に反対

クリスチャンは戦争に参加できない、否、絶対にしてはならないというのがフォックスの考え方であり、クエーカー主義の主張である。そしてすべてのキリスト者は聖別された生活をせよと勧め、更にキリスト者の生活では、現われてこない信仰など無意味であるとの考えに立ち、キリストの命令を今、守らなければならないと考えて、奴隷制度にも反対した。

4. フォックスを中心とするクエーカー運動の歴史

1652年、第1回目のクエーカーの会合が英国のプレストン・パトリックで行われた。

1654年頃になると、クエーカー運動は英国内で大いに発展し、ロンドン、ブリストル、ノーレッジへと着々と拡大されていった。

1660年、フォックスはマーガレット・フェル (Margaret Fell 1614～1702) と結婚した。

彼女はフォックスにより改宗したクエーカー教徒で、主人は裁判官であったが、夫の死後ジョージ・フォックスと結婚した。スワースモア・ホールの彼女の家が彼らの生活の根拠地であり、また伝道者達の会合場所に用いられた。

1660年、英国には王政復古運動が起った。そして非国教徒のその信仰を許可しないという法律が議会で通過した。このことはクエーカー教徒にとって非常に痛手であった。何故なら彼らは非国教徒と見做されていたからであった。このために約400人のクエーカー教徒が死刑にされ、また多くの財産が没収され、奪われた。

1661年から3,179人のクエーカーの人々が牢獄に入れられた。そして、聖書の次に多く読まれてきた『天路歷程』の著者ジョン・バンヤン (John Bunyan 1628～1688) もまたその殉教者の1人であった。

この頃から彼らはエルサレム、西インド諸島、ドイツ、オーストリア、オランダへ海外宣教師を派遣した。そして彼らの信仰を広く海外にも明らかにした。

1677年から78年にかけて、約800人のクエーカー教徒がアメリカに信仰の自由を求めて移民し、彼地でクエーカー主義を発展させた。特にアメリカのペンシルヴァニア州のフィラデルフィアの町は、クエーカー州と呼ばれるようにクエーカー教徒の多い州である。

ここでペンシルヴェニア州の成立のいわれについて一言触れて置きたいと思う。

英国のウィリアム・ペン卿の息子にウィリアム・ペンという人がいた。(William Penn 1644～1718) ペンは英国の名門の家柄の一つであった。彼は1661年頃からクエーカー主義に関心をもち始め、1666年に信仰告白をなし、伝道者になった。彼の父はチャールズ2世に相当多額の金を貸していた。そこで英国王はこの借金の返済の代りに、彼にアメリカのペンシルヴァニア州の首府フィラデルフィアの土地を与えた。フィラデルフィアとは「兄弟愛」の町という意味である。ここではインディアンと白人との争いは全然なく、どのような宗派の人も迎え入れられた。

1689年まで新大陸のアメリカでもクエーカー主義の信仰による礼拝は禁じられていて、礼拝の自由がなかった。しかし、1689年に、クエーカーの信仰は正式に認められ、公の宗教的自由を与えられ、礼拝の自由を得るに至った。

5. クエーカー主義信仰の神学者

—ロバート・バークレイとジョン・ウェスレーの関係—

クエーカーという言葉は、最初から使われているが、クエーカーリズム（クエーカー主義、友会主義）という言葉は、ごく最近になって使われるようになったものである。初期クエーカーは、その教えを真理と呼んだ。クエーカーとは「真理を宣べ伝える人」という意味であった。このクエーカーの最初の偉大な神学者であり、弁明者はロバート・バークレイ（Robert Barclay）であった。

彼はスコットランド人で、ジョージ・フォックスの伝道開始後20年目にこのクエーカー主義信仰に入信した。彼が1676年に著したクエーカーの立場の擁護論としての『真のキリスト教の神性に対する弁明』（Apology for the True

Christian Divinity) という書物は、ジョージ・フォックス自身の書いた『牧会書簡』と並んでクエーカー主義の信仰思想を、最も思想的に解説した代表的書物である。

この初期クエーカー信仰思想を形成したロバート・バークレイの立場はヘーゲル派の思想主義とネオ・カルヴィニズムの両極の中間に位する。彼はいわゆる自然人 (Natural man) の現状に関しては悲観的であった。しかし現世においてさえも人間の再生が可能であり、人が神と合体し得ると見た点では楽観的であった。神の助けがあれば、人は神に創られたものとして現世、この世に於いて完全になることが出来ると考えていた。そして彼は「内なる光」によってクエーカーの神学を体系化した。

ジョン・ウェスレーはこのクエーカー主義の思想を、彼らの群れの神学者、ロバート・バークレイを通して知らされた。そして特に聖霊に救いの根拠を置き、神との直接の交わり、生活の聖化にこそキリスト教信仰の目的がある、ということを教えられたと言えよう。

6. メソディズムとクエーカーリズムの類似点と相違点

1747年、48年に書かれた或る友人への公開の手紙の中で、ジョン・ウェスレーはクエーカー主義に対する彼の立場を説明している。ウェスレーはそこでクエーカーの神学者ロバート・バークレイとウェスレー自身の考え方を対比しつつ、まずクエーカーリズムとメソディズムの相違点について次の如く指摘している。

(1) クエーカー主義者は聖霊によってのみ神の真実を知り得るとしている。しかしウェスレーは、聖霊によって、直接自分に知らされるものが、理性の証しと聖書の証しとに何ら矛盾しないと考えた。つまり聖霊のみをすべてのルールにすることに反対している。

ウェスレーはルサフォース博士宛の手紙の中でこう言っている。

「理性を放棄することは、とりもなおさず信仰を放棄することであり、信仰と理性とは手をたずさえて行くものであって、すべての非理性的宗教は誤った

宗教であるということこそわれわれの基本的な原理なのです。」

そこでウェスレーは自分も聖霊の証しを重んじる立場であることを認めつつ、両者の相違があるとすれば、私たちの中に働く聖霊の働きが聖書によって吟味され、調べられなければならないことであるとしている。ウェスレーはこの点にクエーカー主義者と自分との相違を指摘している。

(2) クエーカー主義者は義認と聖化の関係で、聖化の程度によって神に義とされると考えている。つまり聖化が義認に先行しているとしている。ウェスレーはこれを功績の義認として強く反目している。また、行為義認信仰であるとして批判している。そして信仰による義認と聖化を強調した。

ウェスレーは、「信仰における義認」という説教の中で、信仰義認に立ちつつ聖化との関係を論じて次の如く締めくくっている。

「特に絶対的な聖潔、また従順が義認に先立たねばならないと主張する彼らの中のある人々には、少しも（註・信仰義認が）考えられていないように思われます。そのような主張は真実からあまりにもはなれており、その仮定そのものが単に明白に不可能であるばかりでなく、またそれは本質的に不合理であり、それ自身に対して矛盾しています。なぜなら罪がゆるされるのは聖人ではなく、罪人であり、罪人であるとの意識のもとにおいてです。」と反論して、信仰における義認が聖化に先行することを主張している。

(3) クエーカー主義者は、真実の教職が聖霊の内示によってのみ可能であると主張する。フォックスは聖霊により動かされるまで説教と祈りをなすべきでないとの立場をとっている。この点について、ウェスレーは反対をし、按手礼（牧師になるための儀式）のような外的なものを内的なものとの一致において主張した。

クエーカーリズムでは、聖霊の内的証しのみを強調し、内なる光の体験の真摯な具現でなければすべての外面の形式、儀式、信仰箇条、讃美歌、聖書、説教、教職制等は空虚なものであるとした。このように前以て規定され内なる霊と遊離した形式は二番煎じの宗教、すなわち他人の経験に基づいた宗教であると考えた。

そのような理解に基づいて、ロバート・パークレイはクエーカーの礼拝について次のように説明している。

「敵すなわち悪魔にとって、礼拝を装うて、誰かを礼拝中に欺くことは不可能である。悪魔は司祭と共に祭壇に進み、説教者と共に講壇に上り、ユダヤ教の熱心党の人々と共にその祈禱に加わり、又神学者と共にその書齋にさえ入ることができる。……ところがその人が一旦この沈黙に入り、己自身の心の働きに対していわば無の状態に入る時、悪魔は締出しを喰わされるのである。」

パークレイはこのように、形式あるものはすべて靈感による働きを除外するものと考えている。

この考え方に対してウェスレーは「牧師への服従について」という説教の中で彼自身の聖職制についての考え方の一端を説明して次の如く述べている。

「牧師は群の前を行き、かれらを真理と聖潔とのあらゆる道に導くものとされています。牧師は『かれらを永遠の生命の言葉で育み』かれらを『混じりけのない言葉の乳』で養うべきです。この『混じりけのない言葉の乳』を絶えず教理に適用し、かれらにそこに含まれるすべての基本的な教理を教えます。叱責に適用し、かれらが正しい道から右にも左にも迷わないように警告します。矯正に適用し、まちがったことをどのように改めるかをかれらに示し、平和の道に導きます。『義を達成するように教えること』について適用し、『彼らが全き人、キリストの満ちた徳の高さにまで』かれらを外的な聖潔へと育て上げます。」

(4) クエーカー主義者の礼拝の本質は、沈黙と反省である。

彼らの神礼拝の主要部分は沈黙の中に、人はお互いに向い合って彼自身の行動を通して神を準備する。クエーカーでは礼拝会で、主を待ち望む沈黙の中で聖霊の体験をしたものが「感話」を述べるという仕方で礼拝をする。したがってクエーカー集会に於ける感話は、講壇からの説教とは目的を異にしている。ウェスレーはこの点、英国教会の39ヶ条の信仰箇条と祈禱書、そして説教集に堅く立っての外的礼拝を考えている。ウェスレーは、聖霊によって動かされるならば、祈り、隣人への働きに押し出されていくことを含めての礼拝を考えて

いた。

以上のほか、ウェスレーは、クエーカー主義に対して、霊のパプテスマと共に水のパプテスマの意義を強調している。また聖餐については単なる表象で、実体を獲得した人々にはその使用を禁止するという考え方に反対した。

ウェスレーはこうしてクエーカー教徒の正直と熱心さを認めながら、その業による義認への危険性と神との直接性のみによる立場に強く反対し、イエス・キリストによる恵みと知恵のうちに絶えず潔められつつ成長せねばならないことを説いている。

次にウェスレーはクエーカーリズムとメソディズムとの類似点についても次の如く語っている。

- (1) あらゆる幸福と真の知識は神のうちにあり、それは聖書によってのみ啓示される。
- (2) 聖書は聖霊によって解釈されなければならない。
- (3) 神の恩寵から離れると、信仰の破船をなす。
- (4) 真の教職とは内なる光により召され、準備され、遣わされる者である。
- (5) 真の礼拝は、その聖霊の内的、直接的働きによりなされる。
- (6) 神のみが正しく良心を教え、支配することが出来る。
- (7) キリストはすべての者のために死なれたので、信じる者はすべて救われる。

要するにクエーカーリズムとメソディズムとは体験主義、内面の強調、聖霊の証示、聖化の強調という点で類似しており、多くの大切な信仰の遺産をフォックスからバクスターを通してうけている。

しかしウェスレーにはアングリカニズムの伝統があったので、メソディズムがクエーカーリズムの如く一セクト（分派）に終らずに済んだとも言えよう。

メソジスト教会は組織の面でもクエーカー主義からいくつかの遺産をうけ継いでいる。

その一つは4季会（Quarterly Meeting）である。これがメソディズムの中に始められたのは、ウェスレーの協力者中著名な人物の一人ジョン・ベネットによっていた。ベネットはこの理念をクエーカーの実践から引き出してきている。

またメソジストが、野外礼拝（field preaching）を歓迎し、その機会をもって

いたのも、クエーカーがやっていたからであった。

更にウェスレーがキリスト論においてわがためのキリスト (Christ for us) よりも、わが内なるキリスト (Christ in us) を重視した背後には、フォックスの強調した「内なる光」の信仰思想の影響をみることができると思う。特にウェスレーの聖霊の確証の教理、体験主義という信仰思想への影響だけでなく、先に述べたメソジストの四季会、会、バンド、班 (Society, Band, Clase) における組織論の中にもクエーカーの考え方がとり入れられていると見られる。

以上述べてきたように、ウェスレーとメソディズムに及ぼしたクエーカーリズムの影響は大きいものがあつたと結論づけることができると思う。

参考文献

- 1 ハワード・H・プリントン著『クエーカー300年史』(高橋雪子 訳)
昭和36年、基督友会日本年会
- 2 Rufus M. Jones “*The Journal of George Fox*” 1963, Capricorn books, New York
- 3 Henry van Etlen “*George Fox and The Quaker*” 1959, Harper Torch Book
- 4 ルファス・M・ジョンズ『ジョージ・フォックス物語』(佐久間寅之助 訳)
1991年、株式会社平井眞美館
- 5 シドニー・ルーカス編『クエーカーの眞義』(入江勇起男 訳) 昭和27年、日本基督友会
- 6 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』1975年、日本基督教団出版局
- 7 ルイス・ベンスン著『クエーカー信仰の本質』(小泉文子 訳) 1994年、教文館